（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　吉田浩美

本論文は、スペインとフランスの太西洋側国境付近に話されるバスク語のアスペイティア方言の動詞述語についての研究である。

バスク語の動詞は、述語としてあらわれる場合、

動詞の分詞形（または原形）＋助動詞

という構造をとることが普通である。これを筆者は「複合形」と呼ぶ。少数の動詞は、複合形計の他に、助動詞を伴わない「単純形」を持つ。

複合形にあらわれる助動詞には、次の４種類がある。

文中の「能格名詞句」と「絶対格名詞句」に人称・数の点で呼応する「du活用」

文中の「絶対格名詞句」に人称・数の点で呼応する「da活用」

文中の「能格名詞句」と「絶対格名詞句」と「与格名詞句」に人称・数の点で呼応する「diyo活用」

文中の「絶対格名詞句」と「与格名詞句」に人称・数の点で呼応する「zako活用」

本論文では、第１章で文法の概要を示し、第２章で動詞述語の構造を示した上で、第３～６章で上述の複合形を扱い、第７章で助動詞が動詞を伴わずにあらわれる場合を扱い、第８章で単純形を扱っている。第３～６章では、その構造にあらわれる動詞を最大限列挙し、主なものについては豊富な実例をもとに詳細な検討を行っている。特に、「呼応」するはずの名詞句（たとえば、du活用の場合は、「能格名詞句」と「絶対格名詞句」のいずれかもしくは両方）が考えられないのにその活用があらわれるという、いわば例外的な場合の記述に力を注いでいる。また、似たような意味をあらわす、構造の異なるものとの比較もくわしく行っている。文例は、すべて筆者が収集したものか母語話者に確認したものである。

全体として、膨大な実例を駆使しての考察は説得力があり、バスク語研究を大きく押し進めたものと評価できる。先行研究の検討および一般言語学的考察にやや弱点があり、また、扱っている対象が広いため、個々の点での考察不足も散見されるが、それも全体としての価値を損なうものではない。

以上のような評価により、本論文が博士（文学）の学位を授与するに足るものであると結論する。